

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹  
させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住み  
にくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。  
どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来  
る。人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向  
う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作っ  
た人の世が住みにくいからして、越す国はあるまい。あれば人  
でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお  
住みにくかろう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みに  
くい所をどれほどか、寛容で、車の肉の命を、束の間でも住み  
よくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家  
という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人  
の心を豊かにするが故に尊とい、住みにくくせねら、住みにく  
き煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが  
詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云え  
ば写さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き  
、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも瑠璃の音は胸裏に起る。  
丹青は画架に向って塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心眼に  
映る。ただおのが住む世を、かく観じ得て、雪白方正のカメラ  
に淡季滄海の俗界を清くうららかに収め得れば足る。この故に  
無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺縑なまも、かく人  
世を観じ得るの点において、かく煩惱を解脱するの点において  
、かく清浄界に出入し得るの点において、またこの不同不二の